

## 第7章 普墺戦争

### 第1節 デンマーク戦争

#### 1 ビスマルクの登場

フランスがイタリア、メキシコの泥沼で足掻いている間も、ドイツにおいて大きな異変が生じていた。

1848・49年の国民規模の統一運動は反革命の勝利により頓挫した。1851年にはオーストリアを議長とするドイツ連邦が再建されたが、この連邦は名前だけのものであって、連邦政府が連携して自由主義と民主化の運動を圧殺する以外の機能をもたなかった。「小ドイツ主義」か「大ドイツ主義」かの論争にも決着はついていなかった。普墺の隠然たる対立が統一運動を前進させるうえで重大な障害となっていた。

局面を変えたのは、1859年春にイタリアで勃発した戦争である。いまやドイツ人の眼は、アルプスの南側で大きなうねりとなった統一運動の成り行きに釘づけとなる。ドイツ人は原則的にはイタリアの国民運動に共感する。しかし、フランスとイタリアに敵対するのはオーストリアというドイツ人の国家である。前者が勝てば、イタリアの運動に新天地が開け、それがドイツの運動にも跳ね返り励みとなる。オーストリアが勝てば、イタリアの運動は頓挫してしまう。どちらが勝っても負けてもドイツへの影響は必至で、アルプスの向こう側で起きている事件はけっして他人事ではすまされなかった。仏墺戦争（別名イタリア戦争）は重大事だったが、ドイツ諸国は中立を守った。どの国も積極的行動に出るにはあまりに準備不足であったからである。すなわち、有力国プロイセンの出方、戦局の見通し、国内政治勢力の反応、参戦の目的とタイミングなど、読み込めない点多すぎたのだ。オーストリアが窮地に陥るのをみたプロイセンはライン川まで軍を進め、フランスを背後から牽制する挙に出た。結果としてこれが圧力となり、仏墺戦争は決戦を迎えることなく、オーストリアが譲歩するというかたちで終わった。

さて、各国の注視を浴びつづけたプロイセンの出方についてだが、軍事動員とライン進軍は入念に練られた計画に基づく行動のように見える。しかし、実際はこれ以外に執りようのない窮余の一策にすぎなかった。このとき、ビスマルクはまだ政権に就いていない。ビスマルクのように、オーストリアの危難をプロイセン台頭のチャンスとみる急進主義者はイタリア側につくことを、自由主義者はオーストリアと同盟して国民国家の大義に従うことを、保守主義者も同じくオーストリアに同盟して君主政の維持を、それぞれ主張した。このように国の執るべき外交政策をめぐる正反対の対立がある以上、思いきった策は執れない。プロイセンはオーストリアに曖昧な約

束をしてライン防衛を口実に進軍したものの、結局は何もしなかった。動員に欠陥があって十分な数を揃えられなかったのが実情だ。

しかし、仏墺戦争の中途半端な決着はオーストリアとプロイセンに対して重大な結果をもたらした。負けたオーストリアのほうが深刻であった。オーストリアでは敗因はその体制にありとして政治的動揺が始まる。この動揺は1867年までつづくことになった。最初は反動化への道（メッテルニヒ体制への回帰）、つまり官僚主義的中央集権体制から地方の自立化への道であり、かくて、オーストリアはナショナリズム運動に冷淡となった。これはプロイセンの小ドイツ主義を利する結果につながる。1861年になると逆転が生じた。すなわち、1848年のフランクフルト国民議会で活躍したシューメアリンクが首相となってドイツ連邦改革に積極的に着手した。かくて、オーストリアはドイツのリーダーの立場を取り戻すにいたる。

オーストリアがドイツ諸邦をとり込んでいくと、今度は小ドイツ主義のプロイセンの立場が弱まる。このような状況下でプロイセンがリーダーシップを回復していくためには軍事大国になるしかない。1850年のオルミュッツの屈辱も、もとはといえばプロイセンの軍事力の劣勢に由来する。さらに、1859年の仏墺戦争時に露呈した動員体制上の欠陥も早急に処置しなければならなかった。プロイセン軍備拡張問題はこのような背景から生まれた。政府がこの処理に躓いたため、オットー・フォン・ビスマルクが政権の座に就くのである。

ビスマルクは1862年9月に首相に指名された。彼の登場の経緯についてはこれまで夥しい数の解説書が世に出ているので、ここではふれないことにする。彼が登用されたのは、彼が熱心な反墺論者であったからではない。プロイセン軍備拡張問題の処理に窮して退位まで覚悟するにいたったヴィルヘルム王が、破れかぶれでこの男に賭けてみる気持ちに傾いたからである。王はそれまでビスマルクのことをけっして快く思っていなかった。王は彼について「[気違い](#)」という世評を耳にしていたはずである。賭けのつもりで表舞台に引き出されたこの男がプロイセン、ドイツ、ヨーロッパの運命を大きく左右することになるのだ。歴史にはときどき一人の人間の気紛れから大事が生まれることがある。それが歴史家の後知恵分析にかかると、さも必然事であったかのようになる。このときは国王の気紛れがビスマルクを、70年後の1933年にはドイツ国民のそれがヒトラーを政権の座に就けていく。しかし、二人がそれぞれ政権を握る数年前においてすら、彼らの政権奪取とその後の大事件の展開を予想できた者はいないはずである。

ビスマルクが非才であったことはまちがいない。彼がこのとき以来、1890年3月までの18年間、政権の座にありつづけたという事実ひとつをとってみても、彼が第一級の政治家であることは明白である。問題は、大政治家である所以についてだ。ユンカー的保守主義、反民主主義の鑑のように見られるビスマルクであるが、そうした視点からでは彼の治績を説明することは難しい。彼はユンカーを苛立たせたことも、民主主義者を喜ばせたこともあったからだ。18年のあいだ激動に揺すぶられつづけてきたヨーロッパにおいてリーダーが政治的姿勢を一貫させたから、プロイセンは難破を免れた、ドイツは成功したという理解はあまりにも単純すぎる。彼の思想を一つのイデオロギイで括るのはむずかしい。世の偉大な政治家がいつもそうであるように、ビスマルクは一つの思想に縛られない柔軟性をもち、いうならばリアリストないしはオポルチュニストであっ

た。政治実践で重要なのは理論・教義・通説・弁論ではなく現実認識である。彼に取りこぼしが少なかったのは、現実に対して並外れた的確な判断能力をもっていたからだ。ここぞ！ という瞬間には独断専行の誇りを覚悟のうえで実行に移した。自分に従わない部下は容赦なく罷免し、同僚には食ってかかり、上官の助言は無視した。政治家としての彼をひとことで評すれば、まさにマキャベリストそのものだった。それゆえに、彼はつねに論敵と政敵に囲まれることになり、身内や国王の反対に遭うことも少なくなかった。

ビスマルクがフランクフルト国民議会のプロイセン代表としてここに8年間も滞在したことは、持前の洞察力・才知・大胆さを試し、舞台裏での駆け引きや政治的陰謀の技を磨く機会となった。フランクフルトはドイツ情勢を他のどこよりも徹底的に研究できる場所だった。旅行好きの彼はヨーロッパ中の首都を訪れ、各国の状況を把握し、親プロイセングループと接触した。そして、8年間もベルリンを留守にしたことが却って彼に幸いした。ビスマルクは宮廷や官庁首脳部と密接な関係は維持していたが、政治的諸潮流とは一線を画していた。このために議会と民衆運動に距離をおくことができ、過去のしがらみをまったくもたない自由な立場で行動できたのである。絶対君主政を理想とするビスマルクは最初、議会や民衆を心底から軽蔑していたが、やがて政策実行のためにこれらに利用価値があると認めるや否や、周囲の懸念を無視してこれらと政治的取引をすることを躊躇しなかった。

ビスマルクがフランクフルトでもうひとつ悟ったことがある。すなわち、政治の世界における敵・味方の区別は一時的・相対的なものにすぎないこと、国家は本質的にエゴイズムの塊で、いずれの国も他国を犠牲にしてでも勢力拡大を図ろうとしていること、同盟とは共同防衛、共同侵略の目的のために結ばれるもので、それが達成されれば自ずと解消に向かっていくこと——こうした認識である。敵対関係についても同じことがいえる。この認識のうえに立つと、オーストリアはたしかに当面はプロイセンの敵かもしれないが、いつか味方に転じることもありうる、敵対関係の因が解消されたとなると、放置しないでオーストリアを味方に引き入れる策を執らねばならないことになる。

ビスマルクはプロイセン軍備拡張問題をうまく処理した。すなわち、予算案を議会の承認なしに執行することは憲法に抵触することを重々知りつつ、議会に対しては憲法論争をふっかけて平行論議にもち込み、その間に既成事実を積み重ねた。ビスマルクは合憲的处理を断念し、積極的な外交政策を展開することによって外交と戦争の面で赫々たる勝利をおさめ、この榮譽を引っさげて堂々と敵中突破するつもりでいた。こうした迂回作戦はデンマーク戦争（1864年）と普墺戦争（1866年）の電撃的勝利で見事に達成されることになる。「ドイツ兄弟戦争」に勝利し、ベルリンに引き揚げてきたビスマルクを待っていたのは歓呼の嵐だった。成功すれば、もはやだれも文句をいわない。議会はビスマルクの前にひれ伏した。4年間の違法行為は事後承認によって掻き消されていく。

## 2 デンマーク戦争

普墺関係に話を戻そう。フランクフルト時代を通じてビスマルクは、ドイツ統一の主要な障害

はオーストリアと見た。この国はドイツ連邦の機構を巧みに操りつつ、その実、ドイツ統一の妨害者である、と。こうした認識は首相となった後も変わらない。ドイツ統一という大事業の達成にはまずもってオーストリアの排除が前提となる。列強間の牽制力学が作用しているヨーロッパでは、プロイセンの単独行動は危険であり、したがって、盟友を求め慎重に行動しなければならない——ビスマルクはこう考えた。

イギリスが普墺関係に中立であることは最初から明らかであった。イギリスにとってはロシアまたはフランスがヨーロッパ覇権を握ることがいちばん困まることで、それをなんとしても妨げなければならない。普墺どちらの主導権に拠るにせよ、大陸に強力なドイツ国家が誕生すれば、仏・露・独の3国牽制体制が生まれることになり、それはイギリスの国益に適うことであった[注]。

[注] このことはイギリスのみに限らない。19世紀中のヨーロッパで論議的となったのは露・仏の脅威と革命の脅威であって、ドイツの脅威は問題外だった。

フランスが何らかのかたちで干渉してくることははっきりしていた。イタリア統一運動への容喙をみれば、まず介入は確実とみとうえで事を進めねばならない。

ロシアも普墺関係の行方に重大な関心をいただいているのは確実で、事と次第で妨害に出てくる可能性はあった。しかし、プロイセンが東方へ進出を企てないかぎり、ロシアは中立を守ると見られた。おまけに普露の友好関係には特別の保障があった。両国はポーランドを分割領有しているという事情から、ポーランド独立運動を抑えるという共通目標をかかえていた。

フランスがロシアを誘ってプロイセンの前に立ち塞がることがいちばんの心配種であった[注]。フランスとロシアはドイツの分裂状態を好ましいとする点で共通の利害をもっていた。そのことが国家安泰の保障となっていたからである。かくて地政学的には仏露結託の可能性はありうるが、それは幸いなことに当面ゼロに近かった。クリミア戦争でロシアがフランスに苦杯を飲まされたからである。

[注] クリミア戦争が切迫している1853年、フランクフルト駐在大使に着任して間もないころのビスマルクはロシア外交筋と密接な接触関係をもつ一方で、プロイセンと西側諸国の接近を妨げる行動に出た。すでにこの当時から、ビスマルクは普露の友好関係を重視していたのである。

新生イタリアはどうか。国家統一をめぐってオーストリアと敵対関係にあるイタリアは、プロイセンの味方になりうる唯一の国である。とはいえ、この国の国際政治での発言力や軍事力はそれほどでもなく、オーストリアを背後から牽制する程度のことしか期待できない。しかし、反対に敵対行動に動くことを考えれば、プロイセンにとってかけがえのない国であることに変わりない。

おりしも1863年1月、ロシア領ポーランドにおいて独立のための暴動が起きた。ロシア政府は直ちに弾圧行動に出た。ビスマルクにとって好つごうにも、ナポレオン三世はポーランドの運動を支持し、ロシアによる弾圧を強く非難した。そのころパリ講和条約（とくに黒海中立化の条項の削除）の修正を望んでいたロシアはフランスに擦り寄ってきていた。フランスはこれに応じ

ないばかりか、ポーランド暴動弾圧への非難声明を発したのである。露帝アレクサンドル二世はひどく立腹した。このときフランスが条約改定に応じるポーズだけでも示し、かつポーランド問題に不干渉の立場をとっていれば、露仏の提携はあながち考えられないわけでもなかった。

この点でビスマルクに抜かりはなかった。プロイセンは公式上ポーランドの騒動を見守る態度を打ち出しつつ、裏で外交ルートを使ってロシアに同情の意を示した。本来ならば、ロシア断固支持の態度を打ち出すべきところを、曖昧な態度で押しとおしたところがミソだ。ビスマルクは性急かつ傲慢で虚勢をはることがしばしばあったが、状況を見極めなければならぬときは頑固と思えるほど待機主義に徹した。国際政治のゲームでは対戦相手は一人とは限らない、ゲーム観戦者が対戦相手となりうるし、彼らがいつ、どこで介入してくるかわからない、彼らの出方が読めないとき積極的に動くことは禁物——ビスマルクはこのことをよく弁えていたのである。

露仏関係が冷却したのを見届けてから、ビスマルクはふたたびドイツ問題に視線を戻す。そのころ、オーストリアはドイツ連邦構造を変えるための努力をはじめていた。すなわち、シューメアリング首相は自由主義ドイツに誘いをかけていた。メッテルニヒ反動政治と比較すると、オーストリアの路線は同じ大ドイツ主義でも中身がまったく違う。ビスマルクは議会内野党の関心を外に逸らすために、また、軍部や政界に根強く残っている親オーストリア派を安心させるためにも、オーストリアと協調するふりをした。ビスマルクは2つの、相矛盾する目標を追いかけることにした。すなわち、自由主義も大ドイツ主義も彼の本意とするところではなかったが、それらに同調するふりをしたのである。

自由主義ドイツの提唱に対しては、ビスマルクはそれまでのあらゆる改革案を跳び越えた、平等な選挙権に基づくドイツ国民議会の提唱した。これは1849年のフランクフルト国民議会の決議に近いドイツ改革案である。はたして、63年8月末に召集されたフランクフルトの議員集会は1849年の帝国憲法と国民議会に賛成すると宣言した。このドラスティックな改革案にはオーストリアはどうもついていけない。

大ドイツ主義の提唱に対しては、たまたま起きたシュレスヴィヒ=ホルシュタイン問題が答えることになった。ドイツ連邦は連邦としていち早くこれに軍事介入したが、オーストリアを誘って後から参戦したプロイセンは連邦とオーストリアのどちらも出し抜いてしまう。この問題の処理をめぐる、プロイセン主導の小ドイツ主義の有効性と現実性を内外に強く印象づける結果を導いた。

シュレスヴィヒとホルシュタインの両州はそれまで公国として、デンマークと同君連合のかたちでデンマーク王の支配下におかれていた。しかし、内部に複雑な民族事情をかかえていたため、以前から分離独立の要求が絶えなかった。シュレスヴィヒは、圧倒的に多いデンマーク人と少数のドイツ人から成っていたが、ホルシュタインのほうは反対にドイツ人が多かった。1863年3月、デンマークは憲法を改正し、シュレスヴィヒ公国をデンマークに編入することを決めた。これがドイツのナショナリズムを刺激しないはずがない。両公国内のドイツ人はこれに反対し、両公国を独立させたいうでドイツ連邦への加入を要求した。プロイセンがこの後押しをしたため、デンマークとプロイセンのあいだで紛争が絶えなかった。ドイツ連邦議会は1863年3月と4月

の2度にわたってデンマークに対する非難決議を採択したが、効果のないのを見てついに10月1日、軍事介入することを決定した。

そのやさき、デンマークで異変が生じた。11月15日、デンマーク王フレデリク七世が継嗣をもたないまま死去し、新たに王位継承をめぐる紛争が発生。デンマーク人の後押しで前王の従兄弟のクリスティアン九世が名乗りを挙げた。ドイツ系住民は公国の独立のためにアウグステンブルク公フリードリヒを擁立して決起した。フリードリヒはかつてプロイセン軍に籍をおいた経歴をもち、プロイセン王太子と親交のある人物である。彼はドイツ連邦に加勢を依頼してきた。連邦軍は12月にホルシュタイン公国を占領した。

【注】ここはウィーン体制下でドイツ連邦に入る領土と認定されていた。

このときビスマルクの政略が介入した。彼は、デンマークが1852年のロンドン会議の決議に違反したという口実をつける。つまり、列強会議の裁定に従うという建前を前面に押し出すことにより英・仏・露が反対できないようにしたのだ。その一方でビスマルクはオーストリアに共同出兵するよう呼びかけた。1864年1月16日、普墺はデンマークに宣戦布告を発令し、シュレスヴィヒに侵入。この出兵はドイツ連邦の決定にもとづかず、プロイセンの意志でおこなわれた。つまり、連邦の意向を汲みとるかたちで軍事介入するが、その後の問題処理をめぐる連邦から指図を受けないよう、プロイセンは自主的に行動したことになる。

ナポレオン三世のフランスは英国を誘って紛争に干渉しようとしたが、英首相パーマストンはフランスのエジプトでの行動（スエズ運河建設）に不審を覚えていたのと、ヨーロッパの民族運動に余計な手だしはしないとの思惑から、ナポレオンの提案を退けた。普墺が共同してドイツ問題の処理にあたるということであるから、イギリスにはとくに反対する理由がない。イギリスは武力干渉どころか、列強会議の開催にも反対した。こうしてフランスは形勢観望にまわることになった。英仏のギクシャクした関係は白日のもとに晒された。策謀家のビスマルクがこの事実を見落とすはずがなかった。

デンマーク戦争は戦闘自体としてはたいしたことない。デンマーク軍3万に対する連合軍7万では、勝負は最初からついていたも同然である。4月18日、デュッペル要塞が陥落し、デンマークは休戦を申し入れてきた。モルトケ作戦の最初の実践となったこの戦いでプロイセン軍の實力は遺憾なく発揮された。4月のロンドン会議と10月のウィーン講和会議を経て、デンマークはシュレスヴィヒ=ホルシュタインおよびラウエンブルクの3公国をドイツに割譲することに同意した。

この戦争は小ドイツ主義を前進させるうえで、そして、プロイセン憲法紛争を収拾するうえで限らない重要性をもつ戦いであった。ビスマルクの主戦主義は、かつて国民運動が十年以上かかっても解決できなかった懸案事項を半年足らずで片づけてしまったのだ。ところが、ここから先を急がないのがビスマルクの政略家たる所以である。デンマークから割譲された3公国の帰属問題も、ドイツの国民運動が担ぎ出したアウグステンブルク公の就任という問題も未決のまま放置し、世論の変化をじっと待つ態度に出た。時間がたつうちに世論は焦れてくる。ドイツのナショ

ナリズムは徐々に政治的結束力を失いはじめ、アウグステンブルク公よりもプロイセン王のほう  
が割譲3公国の主人としてふさわしいのではないかと思うようになった。こうした世論の熟成こ  
そがビスマルクの狙いであった。

しかし、オーストリアとの共同行動を優先させなくてはならず、ガシュタイン協定（65年8  
月）で両公国の普墺共同管理が決まった。結局、シュレスヴィヒはプロイセンの、ホルシュタイ  
ンはオーストリアの支配地区ということで折りあいがついた。だが、ビスマルクがそれで満足し  
たわけでもなく、また、オーストリアが、本土からは遠隔のこの飛び地を喜んで受け入れたわけ  
でもなく【注】、さらに、ドイツ・ナショナリズムを納得させたのでもなかった。ビスマルクは  
ドイツ・ナショナリズムを利用することはあっても、これに利用されるのはなんとしても避けた  
かった。また、オーストリアと共同出兵したとしても、それはオーストリアをドイツ連邦から引  
き剥がし、ドイツ統一運動でのイニシアティブをプロイセンが握るためのものだった。戦利品を  
めぐる争いは結局のところは普墺の戦争に結びついていくことになるが、これが戦争の主因では  
ない。ドイツ統一をめぐる諸問題がなかったとしたら、3公国の山分け交渉はスムーズに進んだ  
公算が高い。

【注】オーストリアは分割協定を破棄して、北方問題の処理をドイツ連邦に付託した。不幸なこ  
とに、ドイツ連邦はこの要請を断わり、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン帰属を普墺両国間の調  
整に委ねることを提案することによって問題を差し戻した。

ところで、ビスマルクは出兵問題について国内での合意をとりつけていたのではなかった。議  
会は戦費の支出を拒否していたし、国王さえも当初、このような荒療法に難色を示した。ビスマ  
ルクは議会無視の態度を貫いたため、プロイセン憲法闘争は依然つづいていた。ビスマルクの賭  
けは「吉」と出た。赫々たる大勝利は国内世論を混乱に陥れ、自由主義運動に分裂をもちこむ。  
1864年の時点ではまだ決定的なものにならないが、「**ビスマルクはただ者ではない、あの男の主  
張に耳を傾けてみる価値がある**」程度の反応は出てきた。かくて軍事予算問題をめぐると憲法違反  
の政治は“**違法性**”への疑念がはじまったという意味で、ビスマルクにとって一歩前進であった。

ビスマルクは後年、『回想録』のなかで、オーストリアを挑発するために、デンマーク戦争で  
得た3公国の帰属問題を保留したと述べている。結果が出たのをみて原因を措くというやり方を  
『回想録』でおこなう。それをまともに受けとめると、ビスマルクの放つ矢は寸分違わず標的に  
突き刺さったことになる。だが、それは凄腕を強調するためのレトリックにすぎない。彼が戦利  
品の処理をめぐるおこなった幾つかの提案の中身をみれば、この記述が後知恵であることがわ  
かる。ビスマルクはオーストリアに対し、ロンバルディアの再征服をプロイセンが支援する代わ  
りに、シュレスヴィヒ=ホルシュタインを譲渡するよう提案しているのだ。これは不調に終わっ  
たが、ビスマルクの本音を正直に示している。つまり、ビスマルクはドイツ統一運動からオース  
トリアを追放するために、オーストリア敵対政策をおこなったのではない。もちろん、プロイセ  
ン主導の統一運動を考えていたではあろうが——。彼の本意は普墺同盟の復活であり、自由主義  
に反対する君主連合、いうならばメッテルニヒ体制における小ドイツ主義の復活ないしその完全  
実施にある。いろいろな事情で（オーストリアが反対）これが不可能であることを知ったうえで

初めてオーストリア敵対政策を本格化させるのである。

## 第2節 ビスマルクとナポレオン三世

### 1 ビアリッツ会談

普墺の軍事的衝突は不可避と悟ったビスマルクにとって、懸念はフランスの出方である。イギリスとロシアが中立であるか、ないしはプロイセンに好意的であることはデンマーク戦争を通じてすでに検証済みであった。ビスマルクは妨害者となりうるナポレオン三世に直接に打診してみる気になった。ビスマルクは1865年10月4～12日、ビスケー湾を望む保養地ビアリッツで静養中のナポレオン三世を訪ね、会見を求めた。

皇帝はその年の春以来、尿結石症に苦しんでおり、元気がなかった。この会見はプロイセン首相にとって実りあるものに終わったと思われる。両者が会ったのはこれで3度目だが、2人きりでじっくり意見交換できたのはこのときが初めてである。ビスマルクにとってナポレオン三世の人となり、直接その眼で観察できる機会となった。

「プロイセン王のために働く」というフランスの諺はこの会見に因んでいわれるようになった。「報酬なしに他人のために働く」という意だ。この会見においてナポレオン三世がビスマルクの奸計に引かかって何かの約束をしたために、結局、「バカをみた」という故事に因んでいる。だが、この会見の中身はいまひとつはっきりしない。会見そのものが非公式のもので、介添えなしに（ビスマルクはフランス語が達者）おこなわれたからだ。とはいえ、プロイセン首相の旅行までも秘密にすることはできない。プロイセン首相がビアリッツに到着したその日から、諸国の外交筋と新聞社はさまざまな観測を飛ばした。密約成った、否、成らなかった — というように解釈は正反対に分かれる。ナポレオンにはかつてカヴールとのあいだに「プロンビュール密約」の一件があっただけに、ビアリッツで「何もなかった」とする議論は信用されなかった。ウジェニー皇后のお気に入りのテラスで、ヨーロッパ問題についてかなり突っ込んだ議論がおこなわれたようだ。だが、ナポレオン三世は何ら記録に残していない。ビスマルクは直後に国王に報告しているが、これはいつものようにあたり障りのないことばかりの列挙だった。ビスマルクは後年の回想録でこのときの模様を語っている。これとて信用がおけないが、われわれはひとまずビスマルクに従うことにしよう。

ビスマルクは率直に普墺の敵対関係を述べ、皇帝の反応を見た。ビスマルクはユトランド半島の地図を持ち出し、それを指差しながら、プロイセンの要求はシュレスヴィヒで終わりにしたいと述べた。首相はつづける。普墺が衝突したとき、プロイセンはイタリアにヴェネト地方を与えるつもりだが、その際、フランスは中立を維持してもらえないか、と。ナポレオン三世がイタリア問題から手を引きたがっていることをビスマルクは重々知っていた。イタリアがヴェネトを獲得すれば、イタリア問題の半分は解決する。こうなると、フランスはすんなりイタリアから手を引ける。



このとき、ビスマルクから普伊同盟の可能性も仄めかされたであろうし、仏墺同盟の可能性についても尋ねられたはずである。

もっぱら聞き役にまわったナポレオン三世の反応がどうであったかははっきりしないが、ビスマルクの構想にあからさまな反対の意思表示をしなかったことだけは確実のようである。

エーリッヒ・アイクは『ビスマルク伝』第4巻の中で、こう述べている。

「ビスマルクはビアリッツ会談に先立つドルーアン・ドゥ・リュイス[仏外相]との話し合いの中で、こういう考えを漏らしていた。『事件を起こすことは不可能だ、起きるのを待たねばならない、起きたらそのときこそ、これを活用することにつとめねばならない』。今度はナポレオンのほうが、同じ考えをビスマルクに向かって繰り返した」、と。

ビスマルクがいうときは、真意を隠すための外交的常套句にすぎなかった言葉が、ナポレオンの生涯のこの時期には彼の実際の気分ぴったりだった。つまり、皇帝は普墺衝突であろうが普伊同盟であろうが、これらに干渉するつもりはない、また、仏墺同盟をめざして動くこともない。結果をみてから行動を決める、という意味である。

自己顕示欲が強く、万事あけすけ好みのビスマルクの性格から判断すれば、彼が自らの疑問と主張を相手に率直にぶつけたとみてまちがいない。対するナポレオン三世のほうはその猜疑的な性格からいって、率直に答えたり意見を述べたりしたとは考えにくい。ふたりの会談で暗示的なやり取りはあったかもしれないが、取り決めにはいたらなかった、つまり、密約はなかった、とみるほうが自然であろう。ビアリッツ会談後に関係諸国の外交がどのように展開したかをみれば、会談の中身が推定できよう。

## 2 ナポレオン三世の右往左往

ビスマルクはビアリッツから帰ると、すぐにイタリア問題に着手した。1866年2月28日の王の御前会議で了承を得るとすぐにイタリアと交渉を始めた。4月8日に合意に達し、普伊攻守同盟が成立した。これは発効3か月間の時限付きの盟約で、内容は次のとおり。

プロイセンがオーストリアと開戦した場合、イタリアもオーストリアに宣戦する。ただし、イタリアが単独で講和をするのは許されない。勝利後にイタリアはヴェネトを獲得する。

3か月間の時限条約というのも珍しいが、それをどちらがもちだしたかはわからない。それはともかく、ビスマルクは3か月で外交工作のすべてを終了し、戦端を開かねばならないことになった。

普伊同盟はすぐに露見した。イタリアの急激な軍備増強と軍隊移動がオーストリアに警戒心をいだかせ、外交折衝の必要性を感じさせた。オーストリアがアンテナを張り巡らしているところにきて、フランス外交筋から普伊同盟の情報が漏れ出た [注]。南北から挟撃されればオースト

リアは不利になる。そこで、オーストリアはイタリアに無償でヴェネトを割譲することを申し出た。しかし、これまでオーストリアにさんざん痛めつけられてきたイタリアにとって、戦闘抜きでの領土割譲という提案はとうてい受け入れられるものではなかった。

[注] フランス側が意図的に漏洩したことが考えられる。

普伊同盟が成立すると、フランス政府はそれに賛成と表明。それどころか4月と6月の2度にわたり、プロイセンとの同盟まで申し出ている。ナポレオン三世の野心を感じたビスマルクはこの申し出をやんわりと拒絶した。

フランスで何が起きたのだろうか。普伊交渉についてナポレオン三世はひたすら成り行きを眺めるのみであった。交渉についてはむしろフランス政府の許に届いていた。そのため、66年3月以来、立法院でティエールやオリヴィエなど野党議員はおりあるごとに「プロイセンの野望」にふれ、これに対するフランス政府の無為無策を追及していた。ルエル首相は5月3日、「政治的平和、真摯な中立、行動の完全な自由」を声明した。立法院の野党議員はこれに反対であった。ティエールは「プロイセンの野望」を阻止するために、フランスが外交攻勢に出ることを要求。この提案は立法院において満場一致で可決された。5月6日、ナポレオン三世は滞在先のオセールで爆弾発言をおこなった。曰く。「私は1815年の条約を憎む。この条約こそ今日、奴らがわが外交の唯一の基礎に据えようとしていることなのだ」、と。発言の真意がどこにあるかわからなかったが、皇帝が外交的主導権を握れないことに苛立っていることだけは読みとれる。この発言を受けてパリの株式取引所はただちに反応し、株価が暴落した。ところが、つづく5月24日に列強会談の提議がなされると、株価はすぐに反騰した。

紛争の臭いのするところ何にでも介入するのを習性とするナポレオン三世が、このとき待ちの姿勢に転じたのはなぜか。おそらくは何をするにせよ確信がもてなかったからではないだろうか。大陸における保守主義の番人のようなオーストリアを支持するよりも、イタリアやプロイセンの“創る”努力に賭けたほうが国民の受けのよいことを感じとったせいなのかもしれない。あるいは、普墺の軍事的衝突はその兵力の大きさからいって長期化が避けられないと予感し、必ずフランスに調停役がまわってくることに期待したせいなのかもしれない。たしかに、皇帝の国内的基盤は十年前と較べ格段に弱くなっていた。自らの政権を支えるためには対外的成功が必要である。イタリアやメキシコで失敗し、またしても華々しい外征が許されないもとは、外国の紛争を煽り漁夫の利を狙うしかなかった。

いずれにせよ、しばらく鳴りをひそめていたナポレオン三世であったが、事がどんどん進むにつれていささか焦りを募らせていく。現実味のない普仏同盟の申し入れがそれであり、そのほか見込みのない国際会議の提唱もおこなっている。すなわち、皇帝は5月24日、普墺衝突の回避のためにヨーロッパ列強会議を提案。当の普墺はこの提案をまじめに受けとめるふりをし、これを時間稼ぎのために使った。各国への申し入れ交渉も始まったが、月末までの1週間で完全に頓挫する。事前の入念な外交折衝なしの急場提案にはどの国もとらあわなかったのだ。

普墺激突に際しフランスがプロイセン寄りの中立であったことは以上でおおむね明らかにな

った。開戦後のフランスの対応もまさしく同様である。それについては項を改めて述べることにし、その前に、戦争を迎える直前におけるドイツ連邦諸国とプロイセンおよびオーストリアの関係についてふれておかなければならない。

### 3 開戦直前のドイツ

「ドイツ兄弟戦争」もはや不可避とみた連邦諸国の君侯たちと自由主義者はどちらに加担するかを決めなければならなくなった。君侯たちと自由主義者はもともと犬猿の仲であり、両者が足並みを揃えることは、外敵侵入でもないかぎりにはありえない。それゆえ、片方がプロイセンにつけば、もう一方はオーストリアにつくことになる。自由主義者は半信半疑ながらプロイセン側につき、君侯たちはオーストリア側にまわった。事情は普喫にとっても同じで、二者択一しか許されない。かくて、プロイセンは自由主義者を取り、オーストリアは君侯たちをとった。

プロイセンと自由主義者の連携はこれまでの経緯をみればあきらかに奇異の観を否めない。そこにビスマルク一流の計算がはたらいている。ビスマルクはナショナリズムと自由主義に逆らってはプロイセンの未来はないと考え、その流れに乗ることを決意した。かくて、イタリアの国民主義の革命を支持し、直接普通選挙制に従うドイツ連邦議会という提案(4月9日)に連なった。そして、ハンガリーにも手をまわし、そこでの独立運動を煽った。この最後の策謀はさすがに秘密裏に運ばれたが、その効果は結果としては絶大なものとなるだろう。

オーストリアでは自由主義的なシューメアリング首相が前年6月に辞任し、凡庸なベルクレディに代わっていた。この首相にはビスマルクの策謀が見抜けない。多民族国家のオーストリアで、どうして直接普通選挙が実施できようか。他のドイツ連邦諸国は、ビスマルクの民主主義で飾られた議会という連邦改革案に激怒し、迷うことなくオーストリア側にまわった。バイエルン、ヴェルテンブルク、ザクセン、ハノーファーそして自由主義的なバーデンまでもが加わった。プロイセンと国境を接するいくつかの小国だけがこれに参加しなかった。

ドイツ諸国の多数がオーストリアについたのは普喫の力くらべて、オーストリアの優勢を疑わなかったこともある。オーストリアの民衆もプロイセンとの戦争を望み、新聞が敵意を煽りたてていた。このように、戦争直前においてはむしろオーストリア側において反プロイセンに対する結束が堅く、官民一体の行動が執れるように思えた。

結果から考えると、ビスマルク独りにしてやられた感じだが、彼の独断専行がドイツで激しい反発を招いたように、実際のところ、プロイセン内部でも彼の立ち居振る舞いに対する抵抗は大きかった。ビスマルクがとくに、ドイツ自由主義、民主主義と組むという“**禁じ手**”を使ったことは支配層(ユンカー・宮廷・官僚・軍部)や議会の保守主義グループをいたく刺激した。このような世論の四分五裂もとで戦争に突入すること自体が危ぶまれるほどだった。66年5月7日、ビスマルク暗殺未遂事件が発生した。これは南ドイツの学生による企てであったが、ビスマルクがラインラントをフランスに売りわたすのではないかの危惧から生まれたものである。

孤立してもなおビスマルクが戦争に向かってひた走りできたのは、軍部に理解者がいたおかげである。陸軍大臣ローン(アルブレヒト・フォン・ローン)は以前から熱心なビスマルク支持者

である。参謀本部長ヘルムート・フォン・モルトケは初めのうちはぐらついていたが、ローン陸相に与して作戦準備にとりかかった。つづいて3人目の同志はシュレスヴィヒ=ホルシュタインの軍制長官エトヴィーン・フォン・マントイフェルである。彼はもともとビスマルク嫌いで通っている人物だったが、決定的瞬間に臨みビスマルクに味方した。この3人がプロイセン軍の事実上の最高指揮権を握っており、形式上の最高指揮官である国王もこの3人の結束を前にしては従わざるをえなかった。

戦前のビスマルクと戦後のビスマルクを同一視してはならない。たしかに、戦後のビスマルクは威信絶大でカリスマ性を帯びた存在である。こうした見方で戦前の彼を捉えるのはまちがっている。戦前のビスマルクは国王の信認のみが頼りというように、彼の拠って立つべき基盤はきわめて弱体だった。つまり、戦争がなければ彼の計画は達成されない、計画が達成されなければ彼の地位は保てない状態におかれていたのである。だから、彼にとって一世一代の賭けなのである。しかも、目的達成のために彼に与えられた猶予は3か月しかない。この短期間ですべてをうまく処理しなければならないのである。ビスマルクはフランスの中立、イタリアとの同盟という絶対的な条件をクリアしたとき、あとは軍事的専門家に任せる態度に徹した。

与えられた時間があまりにも少ないと思う点ではモルトケも同じだった。即座の動員能力の点でプロイセンの兵力はオーストリアよりも多かったが、人口の点でプロイセンはオーストリアの半分しかいなかった。だから、持久戦はなんとしても避けねばならない。当座の動員兵力の優位性を活かし短期決戦で片づけるしかない。入念な作戦計画、抜かりなき兵站、徹底した訓練が必須だった。対墺戦を想定し戦争準備を進めてきたつもりであったが、短期決着という条件はモルトケにとっても厳しいものがあつた。それでも、彼は勝利への展望をもっていた。

シュレスヴィヒ=ホルシュタイン問題が普墺対立の火付け役となった。65年8月のガシュタイン協定に対するバイエルン、バーデン、ザクセンの不満は大きかった。そこで、オーストリアは頹勢を挽回するためドイツ連邦に付託しようとして、6月1日、駐屯地ホルシュタインから撤兵した。プロイセンはこのオーストリアの行動を「協定」破棄と見なし、6月7日、自軍をホルシュタインに進めた。さらに同月10日、プロイセンは連邦改革案を提出した。その内容はオーストリアおよびルクセンブルグを除き、従来の連邦諸国を以って新連邦を組織すること、議会は連邦議会と国民議会を置くこと、軍隊について北軍をプロイセンが、南軍をバイエルンが指揮するという案であった。ドイツ連邦からオーストリアの除名を中身とする、プロイセンの事実上の最後通牒である。6月14日、オーストリアはこの案を連邦規約違反であるとし、連邦に対して制裁軍を起す動議を提出した。連邦議会は紛糾したが、最終的にこの動議を可決した。

この2日前の6月12日、仏墺条約が成立した。普墺開戦すれば、①フランスは中立を維持し、②イタリアに中立を要求する、③オーストリアが勝利した場合、ヴェネチアをフランスに割く、という中身である。対墺戦争に自信があつたプロイセンにとって必要なことはフランスの中立維持であり、その他はどうでもよかった。

#### 4 ケーニヒグレーツ（サドワ）

プロイセンは6月16日、動員令を下した。しかし、これに呼応し兵を挙げたのはチューリンゲンと北ドイツの小邦二・三のみである。そこで、ザクセン、ハノーファ、クールヘッセンに対して宣戦布告をおこなった。

1866年4月以来、全ヨーロッパが普墺激突を不可避と見なしていたが、南ドイツ諸国は必要な軍備増強を怠っていた。なかでもバイエルンは最後の瞬間までオーストリアに付くか、プロイセンに付くかで迷いつづけた。バイエルンの戦争準備の遅れは政府と軍首脳部のせいだけではなく、国内の空気がプロイセンに対してもオーストリアに対しても友好的ではなかったことに発している。6月半ばにおいて戦闘準備の整った軍隊をもつことができたのはヘッセン=ダルムシュタットとナッサウだけである。7月半ばにプロイセン軍は戦端を開くや、すぐにこれら小諸国軍を停戦に追いやることに成功した。

オーストリア軍において十分な作戦計画が練られていなかった。すなわち、自軍と敵軍の実力を秤にかけたうえ、どのような手順で兵を進めるか、緒戦において防御と攻撃のどちらを優先するか、戦闘が膠着したときどうするか、友軍に対して何を求めるか、このような点で綿密な戦略・戦術の要が練られてなかった。ようやく5月になって軍最高司令官としてベネデックが任命されたばかりであり、彼自身が戦略戦術の問題を臨機応変の処置に任せようとの態度であったから、戦局ははじめから受身防御にならざるをえなかったのである。

墺軍は南軍と北軍に2分された。南軍はイタリアに対して専守防衛に徹することになった。北軍はさらに2分され、その一つはクラカウからシレジエンに配し、もう一つはベーメンからザクセンに出て、ザクセン軍とバイエルン軍と合流してベルリンを衝くという作戦計画であった。墺軍24万5千、同盟諸邦軍は16万で、合計40万5千の大軍であった。だが、バイエルンが本国を空にして軍を出すのを懼れたのと、オーストリアの鉄道が不備であったため進軍は捗らず、却ってプロイセンに機先を制せられる結果になった。

対するプロイセンは30万を用意できた。数のうえで劣るプロイセン軍が苦戦を強いられるはずだったが、参謀総長モルトケは負けるとは思っていなかった。イタリアが参戦すれば、墺軍はこれへの対処のため、相当の軍を割かなければならないからだ。プロイセンは軍を3分割した。すなわち、西部にエルベ軍4万6千を、中央部に第1軍9万3千を、東部に第2軍11万5千を配し、残り4万余を予備軍とした。モルトケの計画ではこれら3個軍を別々に進軍させ、いよいよ決戦となったときに集結させることだった。つまり、分進後一点集中という方針である。従来は決戦以前に確実に全軍を集中しておくのが鉄則となっており、各軍が別々に行動したのち決戦場に向かうというのは、何かの不手際が生じて決戦場に間にあわない軍が出てきてもおかしくない。その意味では斬新な計画であるに違いないが、非常に危険な賭けでもあった。しかし、モルトケの自信は揺るがない。彼は科学技術的要素を徹底的に作戦に応用したからである。鉄道輸送力を利用して軍の移動を迅速に進めること【注1】、工兵隊を投入して道路を改修させ、渡河を容易ならしめること、電信を用いて報告と命令の伝達を速めること、ドライゼ式撃針・後装ライフル銃【注2】を実戦に用いて火力を強化したこと——がこれだ。さらに、ここ数年進めてきた

陸軍改組のおかげで兵隊の平均年齢が下がり、戦術的機動力を高めることができた。

[注 1] 鉄道が与えたのはスピードだけではない、兵員・物資の補給を容易化することによって前線の抵抗持久力を飛躍的に高めた。かくて鉄道は、半世紀前にナポレオンを苦しめた兵站の問題を根本的に解決したのである。

[注 2] ドライゼ (J. N. von Dreyse) が発明した史上初の撃針・後込め銃である。撃針は 1827 年に、後込め式は 1836 年に発明。歩兵に配給されていたが、実戦で投入されずその威力は知られていなかった。これは先込め銃にくらべ射程距離は劣り、後尾からガスが大量に排出されるので射撃手に不快感を与えたが、発射テンポが革命的に速くなり、伏射が可能になったことで、射撃手は自らが標的になることなく敵を撃てる利点があった。普墺戦争で圧倒的な卓越性を証明したため、他のヨーロッパ諸国はたちまちめいめいに後装銃を開発した。Cf. マイケル・ハーワード著、奥村房夫・奥村大作共訳『ヨーロッパ史と戦争』学陽書房、1981 年。142 ページ。

ヨーロッパ諸国の大方の戦前予想によれば、形勢はオーストリア軍に分があるが、戦闘の長期化は免れまいとみた。結果はどうか？ というと、プロイセン軍の圧勝、短期戦闘になった。つまり、あらゆる予想を覆すほどにプロイセンの軍事革命は進んでいたのである。ハードの面での改革も大きかったが、ソフト面での改革も見落とせない。プロイセン軍の戦略指揮はモルトケに委ねられていた。彼は単独で王の名において軍命令を出す権利を獲得した。これによって戦闘の準備と指揮とのあいだが完全に埋められて、作戦行動の一貫性が保証されるにいたった。

プロイセンのエルベ軍、第 1 軍、第 2 軍に与えられた使命は 3 手に分かれてベーメンに進撃することであった。それぞれがザクセン、ラウジッツ、シレジエン経由で主戦場に到達する予定であった。主戦場はベーメンのいずれかの地点と定められていた。これら主力軍とは別に一師団と一旅団がドイツ西方でバーデン、ヴュルレンベルグ、バイエルンを迎え討つ手はずになっていた。オーストリアに同盟した諸国との戦いはたちまちのうちに決着がついた。数のうえで劣るプロイセン軍が、準備不足で戦意に乏しいこれら同盟諸国軍を一蹴してしまったのだ。結果からみると、トラウテナウの戦い (6 月 27 日) [注] を除くすべての戦闘においてプロイセン軍は勝利した。

[注] この戦いでオーストリア軍がプロイセン軍を撃退したとはいえ、前者の死傷者数 5,000 に対して後者のそれは 1,300 にすぎない。

戦争の勝敗を決したのは 7 月 3 日のケーニヒグレーツの戦いである [注 1]。オーストリアに向かったプロイセンの 3 個軍ははじめ互いに遠隔の地点にあったが、予定の計画に沿って進軍するにつれ、ケーニヒグレーツ付近に集結した。兵力はエルベ軍と第 1 軍の計で 12 万 5 千。このほかにフリードリヒ=カール王太子率いる第 2 軍 4 万がいる。ベネデック率いるオーストリアとザクセンの同盟軍は 20 万でプロイセン軍に対して数では優越している。同盟軍はケーニヒグレーツの北西方のサドワ村で堅固な陣地を構築していた [注 2]。

[注 1] フランスでは、実際に戦場となった、ケーニヒグレーツの近郊のサドワ Sadowa の名をとって「サドワの戦い」という。

[注2] オーストリア軍の参謀本部の一部には、サドワが低地であるのと、遮蔽物がないという点で防御地点として適切ではないとする指摘もあった。

プロイセン軍の300門の大砲が一斉に火を吹いたのが午前8時30分、1813年のライプチヒ会戦以来の大規模な戦闘がここに始まった。モルトケは先手をとって敵の防御陣地に被害を与え、次いで持久戦にもち込み、時機を見計らって分遣隊を投入する作戦であった。この分遣隊に予定されたのが、東方シレジエンから接近するフリードリヒ=カール王太子率いる第2軍である。ところが、モルトケの分進攻撃計画に狂い生じせしめたのがこの分遣隊である。プロイセン軍の進撃は同盟軍の反撃に遭って午前11時には完全に止まった。予定された時刻になっても王太子軍が姿を現わさないのだ。電信線が切断され、20マイル東方にいた王太子軍に命令が届いていなかった。モルトケが念のために派遣した伝令騎兵から命令を受け取ってようやく動き出した。プロイセン陣営に焦慮が生まれたのはこの分遣隊の到着遅延の時である。ビスマルクが会戦の場に自ら居合わせて、その局面の一喜一憂と興奮をつぶさに体験した。彼がモルトケの気分を試すために差し出した葉巻の逸話はこのとき生まれたのである [注]。

[注] ビスマルクは葉巻ケースを取り出してモルトケに吸うよう勧めた。ケースの中にはたった2本しか残っていなかった。モルトケは2つの葉巻を丹念に調べ、よい方をとった。ビスマルクは、軍最高司令官がこの落ち着きならば大丈夫だと安心し、自分の葉巻にも火をつけたという。

午後1時30分、オーストリア軍の砲兵がクルーム村の方角を撃ちはじめた。シレジエンに通じる方角である。王太子軍が到着したのだ。モルトケは予備軍の投入を決めるとともに、全軍に総攻撃の命令を発した。

王太子軍の登場は均衡を破壊した。包囲される危険性が出てきたオーストリア軍は退却を決め、かくて、この日の戦闘は午後7時までには完全に停止した。1859年の仏墺戦争の経験を通じて改善されていた砲兵隊は見事な退却戦を展開し、軍主力を引き揚げさせるのに成功した。7月5日にはエルベを渡河し、オルミュッツを経由して東南方向に退いた。しかし、この方角が悪く、首都ウィーンから東に遠く離れた場所に停屯することになった。かくてベーメン全域とオーストリア西部(工業地帯と農業地帯)がプロイセン軍の支配下に入るようになった。ベネデックのミスを衝いてプロイセン第1軍はウィーンとベネデック軍のあいだに割って入り、ベネデック軍のウィーンへの路を塞いだ。かくてプロイセン軍(エルベ軍)にとって首都への道が開けたわけであり、同軍は兵を進め、首都より60キロメートルの地点まで達した。

大勢は決した。オーストリア=ザクセン同盟軍の損失は大きかった。死傷者24,000、捕虜20,000であり、全軍(北軍)の5分の1が戦闘不能に陥ったことになる。プロイセン軍の損失は軽く、死傷者の計で9,000にすぎない。7月5日、ベネデック軍を視察に訪れた墺外相アレクサンドル・メンスドルフはウィーン本省に、多数の将校と200門の大砲を失った北軍はもはや指揮官も武器もない7万の烏合の衆でしかないと報告した。軍と政府首脳部の戦意喪失は甚だしく、もはや休戦講和を請うしか術がなくなる。

壊滅状態のオーストリア北部戦線に対して、南部戦線はどうであったか。ここでは対照的にオ

オーストリア軍は大勝をおさめていた。プロイセンが開戦したのにつづきイタリアも翌17日、オーストリアに宣戦布告を出し戦端を開いた。しかし、戦争の経過は新生イタリアにとって惨めなもので、陸戦と海戦の両方で敗退を重ねた。オーストリアが南部戦線では防備に徹するのみという消極的戦術をとったにもかかわらず、イタリア軍は国境を越えることができなかったのだ。6月24日のクストツァの戦いでは、イタリア軍12万はオーストリア南軍8万に挑んだのだが、墺軍騎兵旅団にさんざん痛めつけられ、死傷者3,800、行方不明4,000を出してミンチオに退いた。かくて南部戦線安泰とみてオーストリア南軍はウィーン防衛に備えるために帰路を急いだ

[注1] Dupuy, R. Ernest and Dupuy, Trevor N., *The Harper Encyclopedia of Military History: From 3500 B.C. to the Present*, Harper Collins, 1976, p.921. ; マックス・ガロ『イタリアか死か — 英雄ガリバルディの生涯』中央公論新社、2001年、542p. pp. 403-411.

[注2] *Ibid.* 長い縦列陣形のイタリア艦隊に対し、オーストリア艦隊は楔形陣形を敷きイタリア艦隊の砲撃に怯むことなく横からイタリア艦隊に迫る。同艦隊が照準内に入るや否や、一斉砲撃を開始しつつ突進して敵縦列を分断した。1千人の乗組員ともに3隻の甲鉄艦を沈められたイタリア艦隊は敗走する。

ケーニヒグレーツでのたった1回の会戦で、かのオーストリア軍が壊滅的打撃を被るとはだれも予想しなかった。オーストリア陣営以上にヨーロッパ全体が驚愕した。プロイセンの勝利は卓越した作戦計画、針発銃による火力の優越、歩兵隊の優れた機動力、系統だった指揮の所産である。これまでの戦闘とは違う面がいくつか出ている。鉄道を利用した分進と糧秣弾薬輸送についてはすでにふれた。プロイセンは騎兵を減らし、そのぶん歩兵を増やした。騎兵は偵察と掃討に限定して使うつもりであったが、敵騎兵の襲来に備えを疎かにする結果になり、危うい瞬間も生じた。砲兵隊についてはオーストリア軍のほうが技術的にも戦術的にも優れていた。しかし、この欠陥を補って余りあるはたらきをしたのが歩兵隊の機動性とドライゼ銃の威力である。電信を使った作戦行動がおこなわれたことも特筆に価する。しかし、王太子軍の遅延に示されるように、電信連絡の欠陥も浮きでた。各軍の自主性を重んじる点も過去の戦闘にはないものである。しかし、戦略上の連携作戦があつてこそ自主性は効力を発するはずであるが、この面ではまだまだ改良の余地があつた。

話を戻そう。モルトケは勝利を確信していたが、ビスマルクと同様にヨーロッパ列強の干渉を懸念し、できるだけ早期に和平にもち込みたがった。フランスやロシアはおろか、これまで長く中立を維持していたイギリスさえも介入しようとした。オーストリア陣営でも列強の手を借りて早期和平に漕ぎつけようとした。フランツ=ヨゼフ帝は7月5日、ナポレオン三世にヴェネチア



割譲を条件にフランスの軍事干渉を願い出た。しかし、フランスは調停以外には応じられないと返答 [注]。かくてフランツ=ヨゼフは7月22日、降伏を決意する。

[注] Archive du Ministère des Affaires Etrangères, Paris. Correspondance Politique-Autriche, 492, no.86 et 89.

勝利をほとんど手にした時点でプロイセン首脳部とくに首相と国王のあいだにひと悶着起きた。ビスマルク首相は敵に怨恨を残さないかたちで矛を収めることを考え、ヴィルヘルム王は勝利の儀式としてのウィーン進駐に拘った。軍首脳部もヴィルヘルム王に同調したと伝えられているが、これはビスマルクの『回想録』の記述に惑わされた誤報である [注]。

[注] ユーリヒッヒ・アイク著、澁谷壽一訳『ビスマルク伝』第4巻、ペリかん社、1996年、182ページ。

たしかに、当初はローン陸相や参謀本部長モルトケは国王と同じく首都進駐を考えていたが、ケーニヒグレーツの戦いの数日後には、ビスマルクの精妙な状況判断から生まれた慎重策に賛意を示しており、辞職を考えさせるほどにビスマルクを悩ましたのは国王自身である。国王は「勝者が敵の首都に進駐するのは当然だ」、「勝者に獲物はつきもの」といって、首相のもち出す寛容策に耳を貸そうとはしなかった。“獲物”というのは、戦争を引き起こした主犯格ザクセンの併合であり、オーストリアから僅かばかりの領土を取ることであった。早期講和を唱える首相は、戦争を継続するならば、フランスのみならずロシアからも危険が迫ってくるであろう、オーストリアを足蹴にするような処置はのちのちまで怨嗟を残し、今後のプロイセン外交に支障を来たすことになろう、と強い調子で国王に訴えた。それでも王は頑として首を縦に振らなかった。ビスマルクはザクセンとオーストリアの寸土を国王に諦めさせる代わりに、ハノーファー、クールヘッセン、ナッサウ、フランクフルト自由市、シュレスヴィヒ=ホルシュタインの併合案をもち出した。それでも国王は納得せず、反対しつづけた。

7月24日、首相が国王に送った建白書は、副次的利益に拘るあまり講和の早期締結を渋ることはすべて自分の提案と進言に相反する結果になるであろう、と強い調子で結ばれている。この裏に明らかに首相自身の辞職の覚悟が読みとれる。ビスマルクは最後の手段として王太子の支援を仰ぐことを考えつく。王太子と首相の仲はそれまでじっくりいっていなかったが、この時からはまったく違う。王太子はビスマルクの外交手腕に心服していた。この男こそがドイツの未来を決定づける人物であることを確信するにいたった。首相は内外にわたる自分の政治計画を打ち明けた [注]。王太子はすべてに同意し、国王の説得を引き受けた。

[注] この会談に立ち会った、後のドイツ艦隊初代司令長官アルベルト・フォン・シュトシュは後年、次のように記している。「私がビスマルクその人と直接に出会ったのはこれが最初であった。そして、彼から受けた印象にまさしく圧倒されたことを喜んで告白する。彼の見解の明晰さ、偉大さは私に最大の満足を与えた。彼はどの点でも自信に満ち、また清新であり、思考の一つひとつが全世界を包括していた」、と。エーリッヒ・アイク著『ビスマルク伝』第4巻163ページより引用。

イタリアを無視しておこなわれた普墺休戦（7月26日）はイタリア戦線でも休戦につながっ

た。イタリアはこれを無視して抗戦を続ければよかったが、前述したように、イタリアは伝統的に戦争に弱い。プロイセンが休戦したと知って、イタリアも矛を収めざるをえない。かくて、8月12日に正式に交戦三国間で休戦協定が成立し、次いで10月3日には講和条約が締結されたが、勝利はもっぱらプロイセンのものであって、イタリアのものではなかった。それにもかかわらず、ビスマルクは約束のヴェネトをイタリアに渡した。イタリアの本当の狙いはアドリア海の対岸のトリエステやダルマチアなどイタリア人居住地域をも奪うことだったが、プロイセンもさすがにそこまでの労はとらなかつた。海港への道を塞がれることになるオーストリアから同意を取りつけるのは無理と悟ったからである。したがって、この“屈辱の勝利”はイタリア国民に、残された地域の回収という新たな宿題を課すことになった。これはイタリアに対して2度に及ぶ世界大戦への参戦の伏線をなす。

ともかくも、イタリア人はビスマルクに大いに恩を感じた。また、ナポレオン三世に対してもフランスの中立維持 [注] について感謝を捧げねばならないはずであったが、彼にはローマからの仏軍撤退を要求しつづける。ナポレオン三世も撤退そのものに異存なかつたわけであり、かの「九月協定」に基づいてローマより撤退するにいたつた。しかし、ここで思わぬことが生じた。ガリバルディが兵を起したのだ。ガリバルディ軍の決起の報に接した仏軍は戻らざるをえず、11月3日、メンターナでガリバルディ軍を撃破する。かくてイタリアによるローマ併合の悲願はまたもや延期されるとともに、ナポレオン三世はまたもやローマからの撤退の機を失うことになった。繰り返しになるが、仏軍がローマから撤退するのはナポレオン三世の退位とほとんど同時だった。

[注] 10月3日、オーストリアは仏軍の将軍ルブーフに同地を渡し、将軍がそれをイタリアに渡すという形式をとつた。「屈辱の勝利」と言われる所以である。10月21日と22日におこなわれた国民投票により、併合に賛成64万7千票、反対69票でイタリアへの合併が決まつた。これもまた史上稀に見る大差である。

### 第3節 窮地に立たされるナポレオン三世

#### 1 普墺戦争とナポレオン三世

話は前後するが、フランス側の事情をみてみよう。ナポレオン三世は結局のところ、どっちつかずの態度をとりつづけた。ローマ問題でオーストリアと対立していたフランスは、戦前予想でオーストリアの優位が取り沙汰されていたこともあって、どちらかといえば、プロイセンに同情的であった。だからこそ、野党から攻撃を受けたのである。外相ドゥルアン・ド・リュイス宛ての手紙の中でナポレオン三世は、自分はヨーロッパ会議を通じてプロイセンがもっと強力になること、ドイツ北部がもっと均質になること、ドイツ連邦諸国がもっと緊密に結合することを望んでいることを明らかにした。そして付言していうには、フランスはこのたびの紛争には介入しないが、現在の均衡が著しく破れて、ただ1国のみが利益を挙げるような場合には補償を要求するであろう、とも。

サドワでのプロイセンの勝利はナポレオン三世をきわめて困難な状況に追いやった。皇帝はオーストリアのかくもあつけない敗北は予想していなかった。動転したフランス政府は双方が休戦協定を結んだのを機に武力仲裁にうって出ることを決意した。しかし、ナポレオン三世はドゥルアン・ド・リュイスのこの提案を却下した。というのは、皇帝は、軍事的示威の効果に疑問あるばかりか、ドイツの国民感情を刺激し、他国民から不審を招くことを懼れたからである。そこで、フランスはふつうの外交的仲裁をおこなうことになった。これは皇帝の犯した決定的なミスである。ドゥルアン・ド・リュイスが主張するように、この時、もし政府が監視兵だけでもライン川に進軍させていれば、プロイセンは対オーストリア和平交渉で要求をかなり後退させた可能性が高かったからだ。かくて、オーストリアには恩を売ることができたし、プロイセン主導のドイツ統一に歯止めがかかった公算も大きかった。この仏外相はナポレオン三世に対し、ビスマルクがプロイセン王に対してもっているように信頼していなかった。そこで、頼りは皇帝自身の判断力ということになるが、当時、彼は膀胱炎に苦しんでいる最中で冷静な判断力を失っていた[注]。ともあれ、通常タイプの仲裁でもしていれば、オーストリアがそうした仲裁を足場に何かを引きだした可能性はあつたかもしれない。対するプロイセンにとっては、フランスの介入は何であれ迷惑千万な話であつた。

[注] 理解に苦しむのは、ナポレオン三世の健康状態がフランス外交部を経由して諸外国に筒抜けであつたことである。これでは、ビスマルクに「フランスの干渉は恐れるに及ばず」と確信をいだかせるのは当然であつた。

当時のフランスの国内世論は混乱していた。プロイセンの勝利を喜ぶ者、カトリックの国オーストリアへの同情を示す者、戦争の早期終結を喜ぶ者、フランス政府に即時の武力仲裁に出ていくことを迫る者——などに割れていた。しかし、彼らにひとつだけ共通点があつた。フランス外交が失敗したという認識がこれであり、「サドワで負けたのはフランスである！」という活字が新聞紙上に踊り出る。

ナポレオン三世は7月14日、普墺両交戦国に和平提案をおこなつた。その条件は以下のとおり。

- (1) マイン川以北にプロイセン主導の北ドイツ連邦をおくこと
- (2) 南ドイツに独立の諸邦をおくこと
- (3) オーストリアはドイツ問題から手を引くこと
- (4) デンマークの諸公国はプロイセンに帰属させるべきであること

これがオーストリアに厳しく、プロイセン寄りの提案であることは明瞭である。それでも、ビスマルクはザクセンを含め北ドイツのいくつかの国を要求。ナポレオン三世は同意する代わりに代償を求めた。ビスマルクは返答を曖昧なままにしたうえ「同意する」と述べた。かくて7月26日、ニコルスブルクの仮講和条約が締結されたのである。

ナポレオン三世がプロイセンに有利な解決を望んだのは、彼自身がプロイセン鼻根であつたこと、戦争の趨勢から見て当然の和平案であつたこと以外に、彼に領土的野心があつたからだ。「プロイセンに有利」というが、それは第三者の目から見たときにそうであつたとしても、当のプロ

イセンにしてみれば有利でも何でもなかった。ケーニヒグレーツで大勝利をおさめ、これから自らの手で獲物を取り入れようとする矢先での、第三国の要らざる干渉は迷惑千万な話であったのだ。

ナポレオン三世の目論見がライン左岸にあることは明白で、ようやくニコルスブルク仮条約の直前になってフランスからプロイセンに提示された領土割譲案はザール、ルクセンブルク、ライン左岸のバイエルン、ヘッセンであった。ビスマルクは「ドイツ領土の一片といえども譲らない」と拒絶した。仮条約締結が成った8月17日に、プロイセンはハノーファ、ヘッセン選挙侯領、ナッサウ、フランクフルトを併合する用意のあることを宣言した。パリの新聞はフランス外交の失敗とプロイセンの“法外な野望”を知って沸騰したが、全体としてはやむなしのトーンが前面に出た。フランス政府は「1815年の諸条約は破棄され、ロシアの抑制に必要なドイツ国家の統一は不可避であった」という声明を発した。

ナポレオン三世の外交は完全に失敗した。外交というものには攻勢をかけることによって諸条件を主体的につくりだすのでなければバーゲニング・パワーを欠くことにならざるをえない。局面への反応だけで大きな成果を得ようとしても、それは無理な相談というべきであろう。「1815年体制の打破」という声明を発したところでなんになろう。「フランスは今後フリーハンドを得た」、「これから自由に跳び跳ねることができる」、と心から喜べるのだろうか。ビスマルクは、こうしたナポレオンの受身の姿勢を対フランス外交政策に利用していこうと決意した。

普墺戦争でのプロイセンの圧勝は、同国の長年の紛争的だった軍事予算問題をいっぺんに解決してしまう。それまでの議会の承認を得ない予算案は遡及的に“合法”とされたばかりか、追加予算まで計上されるありさまだった。他方、フランスでは逆の動きが始まっていた。立法院の野党は政府の手温い外交を攻撃しながらも、軍事予算の増額に賛成しないとの態度を明らかにした。今後はいかなる政策も軍事力による威嚇なしに実行できないことが明白になった状況下での、こうした軍拡禁止の措置はフランスの未来に暗雲を投げかけることになるだろう。

## 2 ルクセンブルク問題

ナポレオン三世の行動はフランスの世論にまったく理解されず、不可思議の印象しか残さなかった。ナポレオン三世にとって宿敵オーストリアの敗北はイタリア=ローマ問題からフランスを足抜けさせるばかりか、フランスの同盟国となりうるプロイセンにドイツの統一をもたらすはずだった。皇帝が真面目にそう考えていたとみてまちがいない。その一方で、彼がプロイセンから領土的補償を願っていたことも疑いない事実である。じっさい8月29日、皇帝はプロイセン政府に対し、フランスによるベルギー併合を承認することを交換条件にプロイセンとの同盟を申し入れている。

ビスマルクは前年のピアリッツ会談のときから、ナポレオン三世が同盟を願っていることは知っていた。だが、宰相にとってベルリンとパリの同盟は想定外であった。つまり、フランスと同盟すれば、なんらか領土的補償をしてくとふんでいた。ドイツ統一を願うプロイセンがドイツ連邦の一部をフランスに差し出すことは、世論を考えると不可能な相談である。

ビスマルクの外交はひとつの賭けだった。ナポレオン三世は“兄弟殺しの戦争”に干渉しようとするれば、そのチャンスはいつでもあったのに、オーストリアが壊滅するのを傍観した。ビスマルク自身、後日談で、「6万の軍隊がラインに到着すれば、プロイセンの戦略は根本的に狂ったであろう」と述べている。だから、ビスマルクは、プロイセン軍が武装体制をとったまま、ナポレオン三世の提案する講和条件をほぼ全面的に受け入れたのだった。その講和条件は前にみたように、プロイセン王国が地続きになるのを認めるばかりか、同国主導でのドイツの北半分を統一するのを許すというものだった。ビスマルクが1866年7～8月のフランスの補償要求を退けたとき、ドイツの世論とプロイセン指導層はビスマルクの全面的勝利を確信し、以後、ビスマルクの手腕に全幅の信頼をおくことになった。

戦後、ナポレオンは国内ではまったく人気がなかった。「サドワで負けたのはフランス」という非難はフランス世論に真実味をもって受けとめられた。だから、皇帝はビスマルクに何としても領土の補償を迫らねばならなかった。講和交渉の当初、「補償」はルクセンブルクであったが、やがてベルギーへと変わった。ルクセンブルクがドイツ連邦に属し — ルクセンブルク大公国はドイツ連邦に属しながら、オランダ王国の宗主権を認めていた — それゆえビスマルクといえどもドイツ連邦の一部を差し出すことに同意できない、と皇帝は悟った。しかし、ベルギーは建国以来、ずっと親フランス的であったにせよ、れっきとした独立国である。これに手出しをすれば、ここに利害関係をもつイギリスから疑惑を招くことになる。そこで、皇帝はまたもやルクセンブルクをもち出した。ここはフランス東部国境における戦略的要衝としての価値をもっていた。ビスマルクはその要求を聞くや、それに返答をしないまま病気を理由に[注]雲隠れしてしまった。ドイツ連邦の要塞たるルクセンブルクを明け渡すことに対して、国王をはじめ軍部は真っ向から反対していた。ビスマルクの雲隠れ戦術は功を奏した。プロイセン側から返答のないまま、時間が空費されたからである。

[注] ビスマルクは仮病をつかったのではなく、実際に病気であった。宰相は国王、王太子、政治的ライバル、軍部、フランス政府、ドイツ諸邦との折衝で神経をすり減らしたのであった。彼の神経症は外交折衝の席でも目につくようになっていた。9月のあるとき、仏外交官ルフェーブルがザクセンに関するある言葉によって宰相の怒りを引き起こしたが、そのときこのフランス人は次の瞬間に頭にインク壺が飛んでくるのではないかと思ったほどだった。 — 『ビスマルク伝』第4巻、226ページ。

皇帝は翌年2月にこの問題を蒸し返す。皇帝はビスマルクの同意を得て、ルクセンブルク大公国の「購入」のためにオランダと交渉するという提案をおこなった。「購入」というやや恥ずべきものではあったが、それは他のヨーロッパ諸国とフランスの世論に対して、皇帝が平和を望んでいるという印象を与えた。

ビスマルクは当初、この提案を喜び、すぐさま交渉に応じるかにみえた。実際、彼はベルリン駐在仏大使ベネデッティに対して、フランスの東部国境の「国境修正」についてフランスの要求を地図上に示すよう、具体的な要請まで行っている。しかし、ドイツの世論がそれを許さなかつ

た。ドイツ人は大公国をドイツの領土とみなした。ビスマルクは数週間後の北ドイツ連邦議会で、自由主義派の代議士の質問を挑発してドイツ人の憤激を巻き起こすとともに、議会答弁のかたちを借りてプロイセン政府の意向を明らかにした。ビスマルクは、ナポレオンの計画がドイツの国境ラインを変える試みであり、ドイツ人の民族的矜持への挑戦とまで述べた。それと同時に、彼はイギリスの新聞記者に交渉の模様を漏らした。『タイムズ』紙がナポレオンの「策動的計画」を暴露したことによって、イギリス政府はいきり立つ。これを契機にビスマルクはパリとハーグの合意を打ち消すよう要求。戦争を欲しない皇帝は引き退がった。1867年5月のロンドン会議は大公国の中立を確認し、その結果、プロイセンの守備隊もここを撤退した。ベルギーがそうであったように、この国も永世中立国となった。

かくて、ルクセンブルク問題はフランスにマイナスに、プロイセンにプラスに作用した。ナポレオンの国際的および国内的威信は地に墜ちた。ビスマルクはルクセンブルク問題を喧伝することで、南ドイツ諸国を北ドイツ連邦に引き寄せる手段として活用した。プロイセンはバイエルン、ファルツ、ヘッセン＝ダルムシュタットとの間に攻守同盟を結ぶことに成功した。絵に描いたような、見事な外交的戦略は実を結んだのである。皇帝はビスマルクの策略にまんまと乗せられたことになる。「ビスマルクを信用していたのに、彼は私を裏切った」 — 皇帝はパリ駐在の英国大使に胸のうちを漏らした。

1866～67年の外交的挿話はこのように、ナポレオンに害こそなれ、何らの得を与えることなく幕を閉じる。この一連の事件は普仏戦争への出発点となったことは確かである。以後、皇帝はビスマルクをまったく信用しなくなり、宰相が何かにつけ普仏開戦の口実を探していることを確信するにいたった。ビスマルク自身、後日談において「1870年の戦争は歴史の論理である」と述べた。しかし、厳密に言えば、「歴史の論理」ではなくて、「プロイセン宰相の論理」というべきであっただろう。その後の展開はどうかというと、まさしく、宰相の思惑どおりに進んだからである。当時、ナポレオン三世が — フランス人大多数もそうだが — 親プロイセンの感情をもっていたのは確かであり、ビスマルクさえ望めば、普仏同盟の可能性すらあった。にもかかわらず、宰相はその逆を行った。すなわち、彼の政策自体がフランスを戦争に追い込み、このことによって、他のドイツに対するプロイセンの勝利を決定づけたのである。しかし、一方においてフランスとドイツはこのときを分岐点として、以後、ほぼ80年もの長いあいだ仲違いをつづけることになったのである。ビスマルクがこうした未来を見定めていたかどうかは詳らかではない。

## 第4節 普仏の冷戦

### 1 戦争の切迫感

ビスマルクが南ドイツ諸国とのあいだに結んだ条約本文を公表したとき、それが何のためかはだれの目にも明瞭だった。にもかかわらず、当面、普仏関係は表面的にはそれほど悪くないように見えた。この年はパリ万博の開催年であって、パリはドイツの参加を歓迎した。プロイセン首

脳部がパリを訪れたが、どこでも歓待された。ひとつだけ不気味さを感じさせたのは、プロイセンが博覧会に出品したクルップ社の巨大な鋼鉄砲である。それは鈍い光を発していた。ビスマルクは、フランス人の大多数がプロイセンに敵対的でなく、戦争を望んでいないことを感じた。しかし、上辺の華やかさとは別に裏面で激しい駆け引きがおこなわれていた。

ナポレオン三世は、プロイセンの矛先がフランスにふり向けられていること、早晩、両国の衝突は避けられないことを確信していた。そのためにフランスの軍事力を強化しなければならないこと、戦争に備え積極的外交を展開しなければならないこと、も。ドイツ諸邦の多くがすでにプロイセンに抱き込まれた以上、フランスの外交上の望みは残りのドイツ諸邦、イタリア、オーストリアであった。当然のことながら、ビスマルクはその妨害のために全力を傾注する。彼にとってこれは目新しいことではなく、すべて計算どおりの展開であったのだ。彼のこれまでの努力は何はともあれ、伊・墺両国がフランスに接近しないよう取りはからうことではなかったか。すなわち、普墺戦争の講和時にビスマルクが国内の反対を押し切ってイタリアには特別な取りはからいをし、オーストリアに対して微温措置をとったのは、恩を売り、プロイセンへの遺恨をもたぬようにするためではなかったか。

フランスがライン左岸に対する野望をちらつかせる一方で、ドイツでも同じようにアルザスとロレーヌへの執心を示すような記事が新聞紙上に出はじめる。こうした動きはプロイセンでというよりは、むしろライン川を挟むドイツ諸国で始まったのである、これらの地域はフランスの併合主義を警戒する一方で、プロイセンのそれに対しても脅威を感じていた。そこで、これら諸邦は東と西から伸びてくる触手を払いのけるために、自らの国を含めた強大な国家の結成を望んだのである。アルザスとロレーヌはもともとドイツであり、両州といっしょに、ライン川に跨る国家を建設できないものか？ — あからさまな合併は要求しないけれども、漠然と、両州のフランスへのかつての併合【注：ルイ十四世治世による】を残念がるようなトーンだ。渦中のアルザスとロレーヌの諸新聞も反応する。それはドイツへの回帰ではなくて、現状の維持すなわちフランス的なアルザスとロレーヌの維持を願望する。たとえば、ストラスプールの新聞『モーゼル通信』は、プロイセン、ファルツ、バーデンで騒々しくなった思潮に反対し、きっぱりと憂慮を表明する。

対プロイセン戦争という考え方はフランス国内の各方面で拡がる。ボナパルト派は、もしこの戦争に勝利すれば、やや沈滞気味の帝政を再強化するであろうと考えた。ウジェニー皇后に近い、もっとも狂信的なカトリック派はプロテスタントのプロイセンの発展を警戒し、カトリックの南ドイツ諸邦との同盟を夢見た。軍部はどうかというと、南ドイツ諸邦は究極的に中立を維持するであろうとの観測のもとに、墺・伊・仏の三国が同盟すれば、フランスの勝利はまちがいないと信じた。

また、フランスの知識文化人のあいだで、戦争切迫への憂慮が広がる。彼らはインテリ特有のペシニズムを撒き散らす。雑誌『2つの世界』（1868年8月号）のコラム記事のなかで、ギゾーは「好戦的、野心的、巧妙な」プロイセンを強調することにより、かつてのフリードリヒ二世の膨脹政策への回帰に警鐘を鳴らす。アレクサンドル・デューマは1867年、『プロイセンの恐怖』

を著わし、来るべき戦争における残虐行為を予告する。また、エドガー・キネーは、同じころ刊行された『フランスとドイツ』と題する著書で、本来の使命から逸脱したドイツは退廃的なフランスの公然たる敵となったことを告げる。プレヴォ=パラドールは、1868年に出版された『ヌーヴェル・フランス』のなかでプロイセンとの戦争を予告し、強敵ドイツへの敵愾心を煽る。もしフランスが負けるようなことでもあれば、それこそフランスにとって滅亡を意味するという。

だが、知識人のペシニズムはフランスではさしたる国民的反応を起さなかった。さすがに策略家ビスマルクに対してこそ嫌悪感を露わにするものの、フランス人にとってドイツ人は知的であり、素朴であり、親フランス的でありつづけた。とくに左翼はドイツ鼻根のままであった。自国の帝政の専制政治がカトリック教会と結びついているだけに、反カトリックの左翼はプロテスタントのプロイセンの伸長に期待をかけるのであった。

ともあれ、緊張が高まりつつあったとはいえ、全体としてフランス世論は不安をいだきつつも平和を願望していた。とくに実業界はそうだった。したがって、もし普仏領国の首脳部が緊張をもたらさなかったとしたら、平和は持続した可能性が高い。大衆というのは本来、受動的な存在である。

## 2 駆け引き

オーストリアを打倒して意気揚々たるプロイセンではどうか。ここの世論において多少の好戦熱はあったが、それがすぐさま開戦を要求するほどの圧力にはなっていなかった。国民はあくまで政府首脳部の指示に従うつもりだった。普墺戦争の勝利は政府首脳部への信任を厚いものにしていった。ここでは支配層と非支配層の関係は緊密である。だから、支配層が戦争を起こす気になれば、国民はいつでも呼応できる体制にあった。

前に概観したように、同じ時期のフランスでは混乱が渦巻いていた。戦争が切迫していることについては、与野党の別を問わず政治家たちは一様に感じていた。だが、国民世論はそうではなかった。プロイセンに恐怖を感じる者、プロイセンを崇敬する者、何であれ戦争を嫌う者、戦争ありえずとの楽観的気分に入る者というふうに、世論に大きな分裂があった。首脳部はこれを考慮に入れなければならなかった。かくて、世論動員、軍備増強、積極外交を早急に展開しなければならない — このような未消化の課題が山積していた。おまけに、長年の強権政治への飽きもあって政府への信任は薄まっており、世論が少々のもことで動くとも思えない。このような準備不足で勝てるという保証はどこにもなかった。内外の政治や軍事に直接かかわり、実務に通じている者 — 政治家のことではない — にとって危機感は相当のものであったとみてよい。

以上述べてきたように、プロイセンとフランスとでは臨戦態勢において天地の差があったのである。もうひとつ付け加えなければならないことがある。プロイセンの支配層は軍部と議会内の亀裂が急速に狭められつつあったのに対し、フランスではそれまで押さえ込まれていた矛盾と対立が一気に吹きあがってきた。皇帝大権のみがそれを調停できたのだが、その肝心かなめの皇帝が病気になってからというもの、統制力は失われてしまった。そうなると、与野党各派はてんでばらばらな行動をとりはじめる。



外務省に巣食う強硬派は皇帝に外国の真実の情勢を伝えなくなる。ベルリン駐在大使ベネデッティとウィーン駐在大使のグラモンはともに好戦熱を煽るような情報を本国に送ってきた。曰く、「プロイセンでは軍民間に亀裂がある」、「ウィーンはパリに味方するであろう」、「南ドイツ諸邦は中立維持をするか、仮に挙兵したとしても形式的な徴兵のみに終わるかのどちらかであろう」— こういった具合である。このような情報を前にすれば、政府内に楽観論が広まるのは避けられない。真剣に戦争準備をしなくても、外交上の措置だけで勝利は確実ということになる。

1867年4月以降、ナポレオン三世はくり返しオーストリアに攻守同盟を提案。その提案にはむろん領土的修正が織り込まれていた。フランスはライン左岸を獲る、オーストリアはシレジエンを受け取り、ドイツ諸邦とともに南ドイツ連邦を結成する、というもの。もともとザクセンの外務大臣で、現在はオーストリアの外相をつとめている、ビスマルク嫌いのボイストはこの提案をにべもなく拒絶した。同年8月、ナポレオン三世はザルツブルクでオーストリア皇帝フランツ=ヨゼフと会見し、再度同盟の申し入れをおこなったが、このときもフランツ=ヨゼフは関わりあいを拒絶した。

ウィーンとの同盟計画が頓挫したため、フランスは今度は仏・墺・伊の三国同盟の計画をもち出す。それは思いのほか期待十分の展開となった。1868年6月におおよそその一致を見た。条約草案の述べるところによれば、「**当事国は相互に領土の保全を保証するとともに、戦時には相互に同盟し、単独講和はこれをしない**」。だが、ここで面倒な問題がもちあがった。またもやローマ問題である。イタリアは条約締結の条件として、1867年以来ローマに駐屯するフランス軍の撤退を要求した。ナポレオン三世個人としては異存ないものの、国内のカトリック派の反応が怖かった。皇帝がローマ教皇を見殺しにしたという汚名だけは何としても避けたかったのだ。根っからの教皇崇拝者であり、最近とみに皇帝に対して影響力を増してきたウジェニー皇后がそう唱えるだけに、ローマ撤退はできない相談に思えた。皇帝が最終的にこの提案を拒否したため、条約案は宙に浮いた状態になった。

しかし、皇帝は落胆しなかった。オーストリアが一年前と違うことに気づき、オーストリアのほうを向きなおる。皇帝はウィーンに向かっている。もしプロイセンがマイン川を越えたら戦争になるだろう、と。そして同年7月中だけで3たび、ウィーンに攻守同盟の締結を提案した。すなわち、「**同盟が成立すれば、ウィーンはドイツにおける昔日の地位を取り戻すだろう**」、「**ヨーロッパ会議がそれを保証するであろう**」、と。だが、ボイストは取りあわない。それどころか、「**フランスが武装解除することで現下の緊張を緩和せよ**」とまで主張した。

翌年初めになっても、フランスの提案により仏墺間の参謀総長会談がもたれた。しかし、結果は依然としてあいまいなままに終わった。ウィーンは、もしビスマルクがフランスに戦争を仕掛けたとき、フランスが余勢を駆って南ドイツに侵入した場合にのみ、講和のために介入するつもりでいた。これは普墺戦争時に、かつてフランスがとった態度と瓜二つである。オーストリアのこの態度から察するに、フランスへの遺恨にはかなり深いものがあつたといえよう。ナポレオン三世がそれでもウィーンに秋波を送ったのは、危機意識はさることながら、ウィーン宮廷の真実の情勢が彼に伝えられていなかったせいであろう。

1870年6月14日、フランツ=ヨゼフはフランスのルブラン将軍に、「オーストリアは平和を望んでおり、やむをえない場合にかぎり参戦するであろう」、「ナポレオン三世が南ドイツに征服者としてではなく、解放者として現れた場合には、オーストリー=ハンガリー王国はフランスに味方するであろう」、と伝えた。1870年6月といえば、スペインの王位問題が普仏の緊張関係を極度の高め、一触発の危機が生まれているときであった。ここにいたっても、ウィーンの態度は煮え切らなかったのである。

ナポレオン三世は南ドイツ諸邦にもはたらきかけた。バイエルン、ヴュルテンベルク、ヘッセン=ダルムシュタットはプロイセンと一線を画しており、まだフランス側に引き寄せる可能性が残されていた。1867年、ストラスブールの駐屯軍を訪れたデュクロ将軍はヘッセンにまで足を延ばした。将軍は首相ダルヴィックに、南ドイツ諸邦との連携を求めているというフランス皇帝の意向を伝えた。

同年春になると、プロイセンは関税同盟の再編をもくろんで関税議会の設置の建議をもって、南ドイツ諸国への圧力をかけはじめていた。パリとウィーンは同年六月、関税同盟許すまいとして干渉した。ナポレオン三世はフランツ=ヨゼフとのザルツブルク会談（1867年8月）の帰途、バイエルンとヴュルテンベルクに立ち寄り、フランス、オランダ、ベルギー、オーストリア、南ドイツ諸邦との間にカトリック経済同盟を計画中であり、両国がこれに参画するよう勧誘した。

しかし、ひょんなことから計画自体が露見してプロイセンの知るところとなった。これはプロイセンでは深刻な受けとめ方をされたが、この計画はもともと大国の利害関係を調整しなければならぬ性質のものであり、実現まで時間がかかりそうであったし、じっさい陽の目を見なかった。同じころ（1868～69年）、フランスの東部鉄道会社は国からの指示により、フランスからルクセンブルクへ、そしてベルギーのリエージュに通じる鉄道路線の買収を行おうとした。この計画も、同様の計画を練っていたプロイセンへの先手打ちだった。もしこの鉄道路線がライン地方にまで延ばすことができれば、西ヨーロッパ大陸の南北経済が統一されたことになる。しかし、この計画反対の声はドーヴァー海峡の対岸から届いた。ベルギーに経済的な利害をもつイギリスはこれの撤回を迫ったのである。結局、69年4月、フランスは鉄道買収計画を断念しなければならなかった。

かくて、普墺戦争直後から普仏戦争直前まで執拗に展開されたナポレオン三世の外交攻勢はことごとく失敗に帰したのである。オーストリアにはフランスへの怨念が残っており、イタリアはローマ問題でフランスの干渉を嫌っていた。いちばん有望と目されていた南ドイツ諸国はプロイセンに呑みこまれる不安とフランスの領土的補償への恐怖との板挟みになりながらも、当面の独立性維持のために最終的にパリから送られる秋波に応じなかった。

### 3 防衛戦争か？ あるいは予防戦争か？

戦争は突入するまでが難しい。大国が小国を相手とする場合でも、正当な名分をもたずに飛び込むのは第3国の介入を招き、予期せぬ事態に陥る恐れがある。それがもし侵略的色あいをもつものであれば、なおさら開戦事由に工夫を凝らす必要がある。有史以来、今日にいたるまでの戦

争において、公然と「征服」の看板を掲げて戦いがおこなわれた試しはない。必ず防御的な名分とか、止むに止まれぬ動機とか、「聖戦」とかの名分が掲げられてきた。その意味では、最初から性格上、防衛的な戦争の場合は名分に苦勞することはない。だが、名分には苦勞しないが、戦いの進め方で苦勞する。

戦争が起こるとき、強者が挑戦者で弱者が防禦者である場合が多い。弱者が挑戦者となるのは稀である。わざわざ負けるために強敵に挑む者はいない。弱者が強敵に立ち向かうのは止むに止まれぬ（防御的）場合が多いし、第三国からは同情心をもって眺められるのが通例である。戦争は軍事均衡が欠けた場合に発生しやすい。したがって、戦争はふつう強者が弱者に対して挑む形式のもの、いうならば侵略的性格をもつものが圧倒的に多い。だから、この“侵略性”を薄める必要があるのである。どの角度からどう見ても侵略性の覆いきれない場合、「予防戦争」なる名分が持ち込まれる。すなわち、「殺られる前に殺れ」、と。

ビスマルクはその点でたいへん楽であった。普仏戦争は強者が弱者に挑戦するタイプの戦争であったが、外見上、そうは見えない戦争となったからである。プロイセンの戦争は本質的に小国の併呑であって、その意味で侵略的な色彩をもつが、もっともらしい名分はぜひとも必要であった。そこで、「ドイツに統一国家をもたらすため」という大義名分がかかげられた。この看板はドイツ諸邦に対しては説得力をもたなかったが、敵国フランスを除く英国、ロシア、イタリアなど第3国に対しては威力を発揮した。つまり、ナポレオン三世の外交上の失点があまりに大きく、開戦の名分に特別な工夫を凝らさなくても、その正当性は自明であった。フランス皇帝が普墺戦争時の仲裁料として領土的補償をもち出したのはいかにもまずかった。“火事場泥棒”もどきのこの提案はドイツ諸邦にパニックを巻き起こした。こうなると、プロイセンの掲げる「ドイツ国民の統一」という看板がいかにも輝いて見える。人にとって自主独立のほうが気楽であるに違いないが、はっきり泥棒とわかる人物から何度も強請られるようなことが続けば、この悪人よりは少々マシな保護者にすり寄り、この保護者と一緒に悪人を懲らしめようとするのが人情というもの。たとえ、その保護者にどこか押し付けがましいところがあったとしても —。

フランスに果敢に立ち向かうプロイセンは弱者のように見えたが、実際は強者であった。モルトケは「予防戦争」の立場をとり、普仏の衝突が避けられない以上、開戦は早いほうがよいと考えた。相手側に戦争準備成っていないとの観察をもとに、そう主張したのである。いかにも、戦争に勝つことを至上命令と考える軍人らしい発想である。1867年の時点で、プロイセンが直ちに50万の兵力を動員できる準備態勢にあったのに対し、フランスはせいぜいのところで32万しか動員できないであろうとみた。

しかし、外交畑から身を立てたビスマルクは事を急ぐのは危険とみる。むろん彼も、ドイツ統一過程の最大の障害となるフランスとの激突を望んでいたが、ドイツ側から攻撃をかけるのは好ましくないと考えた。戦端を開くにあたって、どうしても防御的スタイルをとりたかったのだ。だから、1867～70年のビスマルク外交における執拗な対仏挑発である。戦争がいつ起きても怖れる必要のないことを知っていたからこそ、ビスマルクはフランスを翻弄しつづけたのである。1869年2月になっても、彼我の軍事的力関係は不変であった。ビスマルクの気掛かりは外では

なくて、内にあった。つまり、ヴィルヘルム王が弱気の虫に囚われ、陸戦の覇者＝フランスという固定観念に取り憑かれており、「ここぞ」というときに、逡巡するのではないかが懸念されたのである。

ビスマルクはひとつの仮説を信じていた。フランスが躍起になって同盟国探しをしても、フランスは結局のところ、孤立してドイツと戦わねばならないであろうという仮説がそれである。ビスマルクのこの確信はどこから来るのだろうか。

ビスマルクはロシアの中立を信じて疑わなかった。同国にクリミア戦争の遺恨があり、さらにポーランド暴動時（1863年）にナポレオン三世が干渉した思い出がある以上、ロシアがフランス側について戦争に介入するとはとうてい考えられなかった。ロシアよりも、オーストリアに対する懸念のほうが大きかった。普墺戦争の講和で手心を加えたつもりだったが、それでも遺恨の火は完全に消えていない。プロイセンに、もし現実的な脅威が生じるとすれば、「仏墺同盟」のみであった。そこで、ビスマルクはロシアのカードを切ることを思い立つ。すなわち、ロシアのバルカン進出政策を支持した（1868年）。ロシアがバルカン半島に触手を伸ばせば、同じ意図をもつオーストリアと衝突するのは避けられない。もし、オーストリアがフランスの肩をもてば、プロイセンはロシアをけしかける。こうすれば、ペテルブルクはウィーンに対する圧力となるであろう。1870年6月4日、ビスマルクはロシアから、オーストリアがプロイセンに宣戦してくる場合にプロイセン側に立って参戦するとの約束を取りつけた。このようにビスマルクが普露関係の強化に腐心したのは、オーストリアが動かぬよう“繋ぎ止める”ためである。

イタリアは最初から心配いらなかった。イタリアはプロイセンと国を接していないため、鞅当での利害関係はなかったし、普墺戦争の処理でプロイセンに恩義を感じていた。フランスがイタリアの眼前にこの恩義を霞ませるほど大きな補償をちらつかせるとは考えにくかった。たとえ、フランスがローマから撤兵したとしても、イタリアにしてみれば、これは当然のことで恩義に値するものではなかった。

こうなると、問題はイギリスの出方のみということになる。しかし、この国に対する懸念も大きくなかった。フランスへの牽制としてイギリスは以前よりプロイセンの伸張に暗黙の支持を与えていた。イギリスはヨーロッパの均衡維持を第一と考え、この均衡決壊こそが自国利害を脅かすものとして怖れていた。そこで、ビスマルクはナポレオン三世の対ベルギー＝ルクセンブルク政策を利用して、イギリスのフランスへの不信感を強めることにつとめ、実際、そのような展開になった。

最後に、プロイセンの草刈場としての南ドイツの問題が残った。オーストリアとフランスもここを狙っていた。フランスはオーストリアをも誘い、南ドイツ諸国に新関税同盟の結成をもちかけた。ビスマルクは関税同盟の更新をもってこれに対処した。1867年中のビスマルクの努力はもっぱらこの関税問題に向けられることになる。彼は何とかしてこの経済同盟を軍事同盟で裏打ちさせようとした。しかし、バイエルン、ヴェルテンベルク、ヘッセンは仏・墺への不審感をもつ傍ら、プロイセンの誘いかけに対しても野心を感じていた。1868年秋から70年初にかけて、ビスマルクが受けとる報告書は悲観的なものばかりであった。70年春、バイエルンのジャーナ

リストは、「南ドイツ諸国は、ビスマルクの希望するように北ドイツ連邦の中に飛び込んで来ないであろう」と述べた。これはたしかにビスマルクの心配の種であったが、同時に、南ドイツ諸国とフランスの同盟も杞憂であるように思えた。ビスマルクは結局、南ドイツ諸邦は中立政策を維持し、普仏激突の直前にならなければ態度を決しないだろう、ドイツ国民戦争という御旗の下でなければ積極的にプロイセン陣営に与しないだろうとみた。だから、その「ドイツ国民戦争」の口実探しだけが残された課題となる。それには焦らず、ジッとチャンスの到来を待たねばならない。

(c)Michiaki Matsui 2014

(最初のページ [http://linzamaori.sakura.ne.jp/watari/reference/napoleon3\\_1.pdf](http://linzamaori.sakura.ne.jp/watari/reference/napoleon3_1.pdf))